

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	岡田 崇志
論文担当者	主査 中込 隆之
	副査 石原 正治
	副査 木村 卓
学位論文名	Sex Differences in Management and Outcomes of Cardioembolic Stroke: Post HOC Analyses of the RELAXED Study (心原性脳卒中の治療や治療成績における性差について： RELAXED 研究の事後解析)
論文審査の結果の要旨	
<p>(背景) 脳卒中は、世界的にみても長期的な機能障害を伴い、死亡率の高い疾患の一つである。その予後規程因子として様々な報告があるが、その一つとして、性差が脳梗塞発症後の予後に影響を及ぼすとの報告がある。しかしながら、その多くは、脳梗塞マウスなどの動物実験による報告であり、ヒトにおいて性差が脳卒中発症後の予後及ぼす影響に関しては十分に検討されていない。(目的) 本研究では、非弁膜症性心房細動によって発症した脳梗塞又は TIA 患者で、急性期にリバーロキサバンを投与された症例 [1303 名 (女性 551 名、男性 752 名)] のデータをもとに 90 日後の神経機能の転帰を Modified Rankin Scale (mRS) で評価し、性差が脳卒中患者の予後に与える影響に関して検討した。(結果) 女性 (551 名)、男性 (752 名) 間の比較検討において、平均発症年齢 (歳) は女性のほうが有意に高かった (女性 : 80.6±8.9、男性 : 74.5±9.2)。また、脳卒中発症前の mRS (pre-mRS) のスコアが 0~1 の機能良症例の割合は男性の方が有意に高かった (女性 : 74.7%、男性 : 85.8%)。一方、1. 脳梗塞や TIA の既往、2. 脳出血の既往、3. 発症時の脳梗塞体積、4. 心房細動の既往、5. rt-PA 静注療法の施行率、6. 血管内治療の施行率に関しては、女性、男性間で有意差を認めなかった。次に、90 日後の mRS (0-2) に関して検討したところ、スコアが 0-2 の機能予後良好症例の割合は有意に男性に高い (女性 : 51.2%、男性 : 63.3、粗オッズ比 : 0.61, P<0.0001) ことが分かった。しかしながら、ロジスティック回帰解析にて年齢、発症前の mRS などの交絡因子を調整後、再解析した結果、90 日後の mRS (0-2) に関して、有意な性差を認めなかった (調整オッズ比 : 1.12, P=0.81)。(考察) 以上の結果より、申請者らは、非弁膜症性心房細動を有する脳卒中患者の 90 日目の予後に性差はないと結論付けた。本研究は、ヒトにおいて性差が脳卒中発症後の機能予後に関与するかどうかを検討した重要な研究であり、得られた知見は学術的意義が高く、学位論文に値する研究であると考えられた。</p>	